### HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ

タイトル	江藤淳『アメリカと私』論 : 変容する「私」
著者	塩谷,昌弘
引用	年報新人文学, 5: 158-199
発行日	2008-12-31

# 江藤淳『アメリカと私』論

――変容する「私」 ――

塩谷 昌弘

### はじめに

アメリカ体験をまとめた留学記である。 メリカのプリンストン大学に留学している。帰国後に刊行した『アメリカと私』(一九六五) (ユ)は、この 批評家・江藤淳は一九六二年から一九六四年までの二年間、 ロックフェラー財団の研究員として、ア

近年では、この『アメリカと私』は同時代の文化史的な背景から論じられることが多い(2)。

存、 例えば、江藤はロックフェラー財団の給費留学生としてアメリカに留学したが、それ以前にも福田恆 中村光夫、大岡昇平、阿川弘之、小島信夫、安岡章太郎、庄野潤三、有吉佐和子といった文学者た

ちが 文化政策があった。 口 ッ クフェラー 九五 二年 つまり、江藤やそれ以前に留学した文学者たちはその文化政策の一環として招かれ 以降のロックフェラー財団による日本およびアジア諸国に対する親米化を企図した ‧財団の給費留学生としてアメリカに留学している(⑶)。こうした文学者の留学の背

たわけである。

Asian Studies Program」という研究会に参加してもいたのである。 九六八) (4) を出したのは、 デルとして、日本の近代化モデルを範とした。このプロジェクトの研究成果である研究報告全五巻 する研究プロジェクトが進行中であった。冷戦構造のもとで、 また、 江藤が留学した時期、 他でもないプリンストン大学であった。 アメリカではフォード財団の資金を背景に組織された日本の近代化に関 アメリカは第三世界に対する近代化のモ 江藤はプリンストン大学で「East

再評価した。この「朱子学的世界像」の再評価こそがアメリカによる「日本近代化論」研究の所産でも 五・三) (5) という評論を発表し、そこで、江戸幕府の公式イデオロギーであった「朱子学的世界像」を あった。つまり、 帰国した江藤は、『アメリカと私』を刊行した翌月、「日本文学と『私』-江藤はアメリカの役割期待に応えたわけである。 危機と自己発見」(一九六

して、 いのだろう。そのように読むことで『アメリカと私』は単なる外国滞在記としてではなく、文化表象と 戦後日本の文化占領の一資料として読まれ得るのだと思われる。 現在この『アメリカと私』を読む場合、 いま述べたような事実が考慮されなければならな

注目して論じていきたい。後に触れるが、江藤淳には「~と私」というタイトルのエッセーが多くある。 かし、本稿ではそのような文化的コンテクストを視野に入れながらも、 『アメリカと私』 私に

稿は「~と私」の端緒である『アメリカと私』の分析を通じて、江藤淳の「私」を表出させる試みである。 り、 この「~と私」というタイトルが象徴しているように、江藤は「私」を批評の対象としたのである。 江藤淳という批評家を理解しようとするとき、この「私」を検証しなければならないのである。 つま

を平面化し、 の記録と記憶は、折り重なりながらも微妙な差異を見せている。しかし、まさにそのような差異の起伏 からなっている。 に日本の新聞社や通信社に書き送った通信文と、帰国してから『朝日ジャーナル』に連載したエ ところで、この 作者の編集の痕跡とでも言うべきものが刻み付けられている。『アメリカと私』は、江藤が留学中 読み手の読みを誘引するかのような配置構成がなされているのである。 つまり、「私」のアメリカ滞在の記録と記憶が編み上げられたテクストなのである。そ 『アメリカと私』は読者の読みを方向付けるような構成をしている。 別の言い方をす ーッセー

がって比較検証して、『アメリカと私』 し、それぞれのテクストが発表された順に再配置する。さらに、テクスト内で語られている時間にした 本稿では、『アメリカと私』の「私」の記録/記憶の差異を表出させるために、既存の配置構成を解体 の [私] の性質を明かにしてみたい。

# 一『アメリカと私』のタイトル・構成

六九年・講談社の名著シリーズ、一九七二年・講談社文庫、一九九一年・文春文庫、二○○七年・講談 江藤淳の 『アメリカと私』は一九六五年二月に朝日新聞社から刊行された。以後、 現在までに、

中に日本の新聞社や通信社に書き送った通信文「アメリカ通信」 社文芸文庫の 朝日ジャーナル』 )四冊 に が刊行されている(6)。 「アメリカと私」(一九六四・九・六~一一・八)と題して連載したものと、 この『アメリカと私』 から成っている。 は、 江藤淳がアメリ カから帰国して、 留学

書いた。 『アメリカと私』を刊行した翌年の一九六六年には 刊行し、それ以後一九九九年の『妻と私』まで、 江藤渟はこの『アメリカと私』を端緒に、多くの「~と私」というタイト トータル五冊、 「戦後と私」、「文学と私」、 二九編にものぼる数を産 jレ 『犬と私』 0) 工 ツ セ など イを

産でもあるのだが、江藤はその再評価を近代日本文学における「私」 発表し、「朱子学的世界像」を再評価した。これは前述の通り、 これらの一 『アメリカと私』を刊行した翌月、 連の 「〜と私」作品は 『アメリカと私』をもって嚆矢としているわけだが、 江藤は「日本文学と『私』 アメリカの の問題として論じたのだった。 危機と自己発見」という評 「日本近代化論」 先に述べ 研究  $\hat{o}$ たよ 所

陥り、 鴎外といった「朱子学的世界像」の影響下にあった作家と、武者小路実篤らその影響下にはなかった 像」のなかに安住していた日本人が、 ェイクスピアの「ハムレット」に関する問題を、 自己の同 ここで、その評論の骨子を見ておこう。まず、江戸幕府の公式イデオロギーであった「朱子学的世界 文学を近代化するために ドが参照され、 性 の危機に陥ったことが指摘される。 逍遙が お雇い外国人という 『小説神髄』(一八八五)を書いたのだと論じられる。 明治の近代化に伴い 江戸戯作的な勧善懲悪主義の観点から論じて落第した 西洋 そして、 に出会うことで「自己の 西洋 坪内逍遙がお雇い外国人教師の出したシ という 「他人」 同 に出会うことで そして、 性 0) 危機に 漱

「白樺」の作家たちが対比され、 |白樺] |= 「戦後文学」という江藤独自の見解となるのである (8)。 漱石・鴎外世代を最後に「朱子学的世界像」 が消えてしまったという

己の の問 の危機が描かれ、「日本文学と『私』――危機と自己発見」では、日本近代文学の「私」における「自 すでに繰り返し言及されていることだからである。つまり、『アメリカと私』では江藤淳の ていることである。というのは、この「自己の同一性」の危機という主題は『アメリカと私』 ここで重要なのは、江藤が「自己の同一性」の危機という精神分析学的な概念 (๑) を文学史に適用し 題が、 同一性」 江藤自身のアメリカ体験として主題化されているのである。 の危機が描かれているのである。したがって、『アメリカと私』は近代日本文学の 同 性

本稿では、『アメリカと私』の「私」がどのように表出しているかを明らかにしてみたい そのように考えると『アメリカと私』を読む場合、この「私」の視点から読むのが適当かと思われる。

次に『アメリカと私』の構成を確認しておく。

この作品は

二部構成になっている。

第一

部の

「アメリカと私」は、

江

藤淳がアメリ

かから帰

国

[した後

書かれた順序とは反対に配置されていることになる に『朝日ジャーナル』に連載したもので、 などに書き送った通信文である。したがって、第一部「アメリカと私」と第二部「アメリカ通信」 第二部の 「アメリカ通信」は留学中に日本の新聞社や通信社

と私」に比べて、通信文として断片的に書かれた第二部「アメリカ通信」は、存在感が極めて希薄にな この配置に従って『アメリカと私』を読み進めると、帰国後に連載形式で書かれた第一部 「アメリカ

私 験 は 得た感想は、 ってしまう。 には、 を 題と話題をつなぐ環がない」のに対して、「アメリカと私」は江藤がアメリカで得た「新しい 「統合した構成力」があると端的に指摘している<sup>(1)</sup>。 アメリカ体験の再構成が為されているのである。 第二部 このことについて、 『アメリカ通信』 Ш 鳴至は より、 「単行本『アメリカと私』を読みとおしてみて、 第一 部のほうがはるかに面白かった」、「アメリ つまり、 帰国後に書かれた「アメリカと 私が カ通信」に . 初に

ある。 るの 化の物語」(1) だと述べている。 通信文として断片的に書かれた第二部 ている。いずれも幾分比喩的な意味もあるだろうが、『アメリカと私』全体を「物語」だとみなしてい 向付けてしまってい そして、この再構成のために第一部 は確 かである。 しかし、これは帰国後に再構成された第一部 . る。 例えば、 また、 佐藤泉は 松下浩幸も「アイデンティティの希求と獲得の物語」(ユ) 「アメリカ通信」 「アメリカと私」は『アメリカと私』という書物全体の読みを方 「自己同一性の危機を強力なテコとした自我の再統合、 には 物語 「アメリカと私」にのみ言えることで、 性や「構成力」は見られない だとし ので

囲み数字を、「アメリカと私」 私』の配置を初出の通りに並べ替えると次のようになる。 そこで、本稿では テクスト内で語られている時間にしたがって再配置してから分析に移りたい。 『アメリカと私』 の各章にはローマ数字をつけた。 をその配置構成に従って読むのではなく、 なお、 便宜的に「アメリカ通信」の各章には それを一 まず、 日 『アメリ 解 体 , カと た上

アメリカ通信」 (第 一 部

- 「第一信」(『東京新聞』、一九六二年一〇月一四、一五、一六日)
- ②「十月二十八日の午後」(同、一一月二四、二五日)
- 「キューバ危機の中で」 (『共同通信』文化特信扱い、同一一月二七日)
- ④ 「"不安な巨人" 日本について」(『東京新聞』、一九六三年一月一○、一一、一二日)
- (5) 「生きている "古さ』(『共同通信』文化特信扱い、同一月一八日)
- 6 「合衆国と地方主義」(『東京新聞』、同二月二四、二五、二六日)
- ⑦「深い南北の溝」(『共同通信』文化特信扱い、同三月二日)

「冬と春の間」 (『東京新聞』、同三月二八、二九、三〇日)

⑨「青春」王気一(司、丘月一二、一三日)

8

- ⑨「青春と狂気」(同、五月一二、一三日)
- ⑩「海老原喜之助の回顧展」(『芸術新潮』、同九月)
- (1) 「私の見たアメリカ」(『朝日新聞』、同九月一○、 一一、一二月
- ②「ケネディ以後」(同、一九六四年二月六、七日)
- ⑨「エリート」(同、三月二一、二三日)
- ④「アメリカの古い顔」(同、五月一、二、三日)
- ⑮「米国から欧州へ」(同、八月二、三日)⑮「国家・個人・言葉」(同、六月一四、一五、一六日)
- ⑰[学問の自由化」(同、九月三、四日)
- 「アメリカと私」(第一部)

- Ⅰ「適者生存」(『朝日ジャーナル』、一九六四年九月六日)
- **Ⅱ**「プリンストン」(同、九月一三日)
- Ⅲ「大学」(同、九月二○日)
- | 「゜ ← ィー (词、一)| Ⅳ 「城」(同、九月二七日)
- V「パーティー」(同、一〇月四日)
- Ⅵ「普林亭主人」(同、一○月一八日)Ⅵ「東と西」(同、一○月一一日)
- ∭「学生たち」(同、一○月二五日)
- Ⅳ [事件] (同、一一月一日)
- X 「別れ」(同、一一月八日)<sup>(13)</sup>

程ヨー 発表されている。①~⑨、⑪~⑮はアメリカで書かれたもので、⑩は一九六三年七月に日本に途中帰国 した際に書かれたものである。⑯は留学を終えて一九六四年七月 を見ると、これらの文章は一九六二年一〇月一四日から一九六四年一一月八日までの約二年間に亘 右に示したように『アメリカと私』は全二七編の文章から成っている。( ) 内に記した発表年月日 ロッパを旅行した際に書かれたものである。 ⑪はその旅行の後、 (頃) にアメリカを発った後、 八月に帰国してから書かれたも 一ヶ月 って

ので、これ以下、

I~Xは帰国後に日本で書かれたものである。

このように発表順に並べ替えてみると、江藤淳のアメリカ留学体験が時系列的に進行していることが

時間に再配置してみたい。すると、それぞれの話は折り重なりながらも、 ある。 とになる。この反復こそが第二部「アメリカ通信」の存在を希薄にしている最大の要因とも思われる。 と第二部でそれぞれ独立してしまっており、全体としては一度きりのアメリカ体験を二度読まされるこ わかる。 このアメリカ体験の時系列的進行とは、言い換えれば、江藤淳の「私」の変容の過程ともいえるので 本稿では、この変容をより明確に示すために、右に並べ替えたものをテクスト内で語られている しかし、『アメリカと私』 の配置構成に従って読んだ場合、そのような時系列的進行は第一部 微妙な差異を見せはじめるの

I 「適者生存」(一九六二年八月二七日~)

である。以下にそれを示す。( ) 内はテクスト内の時制を示している。

- ①「第一信」(同九月)
- ②「十月二十八日の午後」(同一○月二八日)Ⅲ「大学」(同?月)
- Ⅳ「城」(同一一月)
- ③「キューバ危機の中で」(同一一月八日~)
- ④「『不安な巨人』 日本について」

「パーティー」(同~一二月二〇日)

⑤「生きている "古さ"」(?)

166

- ⑥「合衆国と地方主義」(一九六三年二月八日)
- ⑦「深い南北の溝」(同二月一三日~)
- ⊗「冬と春の間」(同?)
  ▼「東と西」(一九六二年~一九六三年三月)
- ⑨「青春と狂気」(同七月~八月)
- ■「学生たち」(同九月)

10

海老原喜之助の回顧展」

同

「事件」(同一一月二二日)

「私の見たアメリカ」(同?)

「ケネディ以後」(一九六四年一月八日)

① IX ①

③「エリート」(同?)

14

「アメリカの古い顔」

(同?)

- ⑤「国家・個人・言葉」(同四月~)
- X「別れ」(同二月~四月一○日~)
- ⑥「学問の自由化」(同?)

の変容過程がより明確になる。その一例として、ここでは時間的に隣接している①とⅡを比較してみた このようにテクスト内で語られている時間にしたがって再配置してみると、『アメリカと私』の「私 ①で江藤は、 プリンストンの町を次のように描写している。

張しつづけるロサンゼル シッピの黒人共学問題の突風は吹いて来ない。 たようなはだざわりはいったいなんだろうか。<sup>(14)</sup> かな教授たち、 でに高踏的な知的ふんいき、大通りにネオンをつけさせぬ一種気取った清潔さ、 (前略) しかし、プリンストンがアメリカであろうか。ややコスモポリタンで、 育ちのよい学生 スの俗悪な空気も見られない。この空気の希薄な感じ、 ―これはたしかにアメリカのある面であろう。 ニュ (下線・引用者) 1 ヨークのスラムの悪徳も浸透して来ない。 が、 礼儀正しくにこや 世俗の僧院とい スノビッシュなま ここにはミシ

これに対してⅡでは、プリンストンの町を次のように描写している。

整然と取り澄ましすぎている。 かに、そこに属するものとしての自分を思い描くことは、きわめて困難であった。それはあまりに からなかった。 デ ア空港に着いたとき、 町の様子は私が日本で想像していたのとあまりちがわなかったが、この美しい大学町の (中略) もしそれがニューヨー 西の空に林立する巨大な墓標の一群のように見えたマンハッタンの、 私は、 この町のいったいどこに自分を容れる余地があるの クのような大都会だったら ワシントンか か らラガ よくわ

冷たい 行くことはむしろたやすそうに思われた。私はそこで自分の輪郭を喪い、 なかに、 げ置 自分の同一性を解消してしまうことすらできそうだった。(エラ) 石造の摩天楼と、 その間を黙々と過ぎて行くけわしい群衆のあいだでなら、 (下線・引用者) あの 画学生のような日常

れているものである。 ぎている」といった形容をしている。①もⅡも同様にプリンストンの町を、美しく清潔でありながらス ッシュ」、「清潔」、「礼儀正しい」といった形容をしており、Ⅱでも「美しい」、「整然」、「取り澄ましす ノッブな町だと描写している。 ①とⅡのプリンストンの町の描写はほとんど同質のものである。①では「コスモポリタン」、「スノビ しかし、ここで注目すべきなのはプリンストンではなく、それに対置さ

のなのである。 である。つまり、 石造の摩天楼」、「その間を黙々と過ぎて行くけわしい群衆」 は「ニューヨークのような大都会」、「巨大な墓標の一群のように見えたマンハッタンの、冷たい、黒い - 膨張しつづけるロサンゼルスの俗悪な空気」といった周縁的なものが対置されている。 ①ではプリンストンに対して、「ミシシッピの黒人共学問題の突風」、「ニューヨー プリンストンの町に対置されているものが①では周縁的なもので、 といった中心的なものが対置されてい クのスラム Ⅱでは中心的なも しか 0) 悪徳」、 . るの Ⅱ で

の構成を再配置してみると至る所に散見できる。 ここでは一例しか示せなかったが、この例からもわかるように、このような違いは 本稿では、先に述べたように語り手である「私」(=江藤)の性質の違いに限定して論じていきた 周縁と中心という対比も非常に興味深い問題ではある 『アメリ カと私

が、

例は次章以降で検証するとして、さしあたって、ここでは「私」の変容の流れを示しておく。 い(もちろん、右に示した例も「私」の感覚の違いだということができる)。「私」の変容の具体的

根ざしており、これ以降に表れる「国家」に帰属する「私」ではない。「自然」や「国家」に関しては、 問題であるため、本稿で触れることは最小限にしておきたい。次に、①~⑨の「私」がある。これはア はじめる。次の⑪~⑰の「私」は、すでに原型的な「私」ではなくなり、「国家」に帰属しようとする リンピックを控えてインフラ整備の進む東京の風景を見て失望してしまう。これを機に「私」は変容し 次章以降で詳しく述べたい。次に、⑩の日本に一時帰国した際の「私」であるが、この「私」は東京オ メリカに行った直後の「私」で、本稿ではこれを原型的な「私」と捉える。この「私」は、「自然」に 「私」が表出しはじめる。この「私」はこれ以降、I~Xの「私」に受け継がれていく。 まず、当然のことだが、ゼロ段階として留学前の「私」が想定できる。しかし、これはテクスト外の

個別的に検証するのでなく、この「私」の表出が特に顕著な箇所を提示していくことにする。 って、各章ごとに個別的に表出しているわけではない。そのため次章以降の具体的な検証では、各章を 以上、『アメリカと私』に表出している「私」の変容の流れを概観したのであるが、これは流れであ

## 二 「アメリカ通信」の「私」

ここでは、「アメリカ通信」の「私」について検証してゆくが、先に述べたように「アメリカ通信

決した日である。「私」はこの「キューバ危機」に遭遇した一週間を振り返って次のように述べている。 の「私」 まず、②の は①~⑨→⑩→⑪~⑰と変容している。以下に、それが顕著に表れている箇所を見ていきたい 「私」を見てみたい。タイトルにある「十月二十八日」とは、 所謂 「キューバ危機」 が解

乾 G なかにはその感受性が濃くよどんでいるのかも知れない。気がつくと合唱は終り、 ういえば、この若い国には一般に「死」に対する感受性が希薄なのかも知れない。そして、 た。そしてまた、そういう終末の予感が、ふだんは人工的で何かが欠けて感じられるプリンストン の町に、ある深い陰影をあたえているように見えることを、新鮮な発見のように思ったりした。そ !いた砂のように吸いこんでいる自分を感じた。<sup>(16</sup> たとえば私は死を想い、 M・ホプキンスの詩を読んでいた。私はその詩の異教的なまでに官能的な自然のイメージを 自分の生い育った文化から切離されたまま死ぬのであれば不幸だと思っ ホッジス嬢は 黒人の

する「感受性が希薄」だとされている。つまり、「私」や「黒人」は「死」、「詩」、「異教的」、「官能的」 する「感受性が濃くよどんでいる」黒人女性ホッジス嬢の読む「官能的な自然のイメージ」の「詩」を 化から切離されたまま死ぬのであれば不幸」だと感じている。そして、「死」を想い、その「死」に対 ここで「私」 た砂のように吸いこんで」いる。 それに対して、プリンストンは「人工的」な町とされ、アメリカという「若い国」は「死」に対 は黒人教会で霊歌を聞きながら、「キューバ危機」を振り返って、「自分の生い育った文 したがって、「私」と「黒人」は「自然のイメージ」を共有して

るのである。この「自然」と「人工」という対比において、「自然」に属している「私」を本稿では原 といった「自然のイメージ」に属しており、プリンストンやアメリカは「人工的」なものだとされ てい

型的な「私」と定義しておく。

違い、 疑いや戸惑いといったものを抱いておらず、無条件に「自分の生い育った文化」を許容しているのであ ここで付言しておきたいのは、「私」が「生い育った文化」(=日本) 「自然」に属しているということである。そのため、この「私」は「自分の生い育った文化」に がプリンストンやアメリカとは

次の⑥では、「私」が南部に旅行したときのことが書かれている。

る。

には決して存在しない。 表情とはちがって、鈍い無表情に塗りつぶされているように見える。このように、美と頽廃した権 どこか放恣な感覚に媚びるようなものを持っている。しかも、これらの館とほとんど背中合せなっ 力の腐臭との対照がつくり出す奇妙にエロティックなアイロニイ-に見えぬものの攻撃に対して耳を澄ませているような、北部の「差別されていない」黒人の て、落魄をきわめたという感じの黒人街があり、そこにうごめいている黒人たちの顔は、 な館が立ち並んでいる。それはたいてい高い厚いヘイか、 たとえばここにはプリンストンあたりには見られない、 南北戦争以前の面影をとどめた古い豪奢 繊細だが強靭な鉄柵をめぐらしていて -それはつねに「正しい」北部 つねに眼 い過敏な

能 教徒のカルヴィニズムより、私の感覚にぴったりする。少なくともここには偽りはないからだ。(い ていると堂々たるものに見える。それは、正義をかかげて隠微な自分を「生」から遠ざけて行く清 プリンストンに来て以来、何か物足らぬものがあると感じていたのが、このアイロニイ、 !の澱りのようなものであることがはっきりしたからである。社会的不正義もこれほどはっきりし 種の官

ここでは「社会的不正義」と「正義」という対比が為されており、「私」は「社会的不正義」に共感を 示しているのである。 かかげて隠微な自分を『生』から遠ざけて行く清教徒のカルヴァニズム」とみなされている。 妙にエロティックな」景色を見て、それを「社会的不正義」と形容している。そして、「私」はそれに 「ほっと」し、自分の「感覚にぴったりする」と感じている。それに対して、プリンストンは「正義を 少し長くなってしまったが、この「私」は南部の「美と頽廃した権力の腐臭との対照がつくり出す奇 つまり、

して有している。 られているが、いずれにしても「私」はプリンストン的な「人工」や「正義」に否定的な感覚を依然と この箇所では、②の「自然」と「人工」の対比が「社会的不正義」と「正義」という対比に置き換え

いる箇所である。 次の⑨は、「私」がプリンストンで起きた学生たちの原因不明の暴動に関して、独自の見解を示して

(前略) それは、平和に耐え切れなくなり、人工的な純潔と美に窒息しかけた若者たちの、 死と破

壊本能の爆発は、 私と同じなにかを共有していることを知って、 界ではない。 壊の本能 ンパス、この秩序立った日常 いる汗の臭いのような正義がきらいだった。 の爆発である。 プリンストンに着いてから、 ちょっと美しい。<sup>(8)</sup> 私のなかにひそんでいる同じものが、それを嗅ぎつける。この美し ―それが人間の常態であるわけがない。 私はそう思いくらしてきた。 しかし、このナンセンスな、 ある満足を感じている。 私は学生デモにくっついて 今、私はここの学生たちが これは私が成長して来た世 花火のように無意味な破 キャ

ここで「私」は、プリンストンで起きた学生の暴動に「死と破壊の本能の爆発」を見てとる。その根 「私のなかにひそんでいる同じものが、それを嗅ぎ付ける」からである。だからこそ、「私」 「無意味な破壊本能」を「ちょっと美しい」と感じるのである。 「無意味な破壊本能」 という「社会的不正義」に共感しているのである。 それに対置されているの 、る汗の は学 例に

社会的公理には否定的な感覚を有しているのである。 6 リスントンに象徴される「人工」や「正義」を社会的な公理として考えるなら、それに反する「社会的 生の 臭いのような正義」である。つまり、ここでも「私」は「人工」や「正義」ではなく、「死と破壊の本 よってプリンストンという「人工的」な町である。あるいは一般的な「学生デモにくっついてい ⑨ の 義」や「死と破壊の本能」とは 「社会的不正義」は、②にあったような「自然」と同義のものだと考えられる。 「私」は、「自然」という「社会的不正義」なものに属しており、「人工」や「正義」といった 「自然」状態そのものであるからだ。 したがって、 いま引用した② というのも、プ

長してきた世界」(=日本) いて揺らぎ始める。 おいても、 さらに、 ②において「私」が「生い育った文化」を無条件に許容していたことは先に述べたが、 プリンストンを は屈託なく信頼されているのである。しかし、この「私」の信頼は⑩にお 「これは私が成長して来た世界ではない」と否定しているように、「私が成 ⑨ に

に記されている。 110は、 「私」がアメリ ·カから一時帰国した際のエピソードである。そのときの東京の様子は次のよう

悉している素材ではない。 ていた大都会のビルやホテルなどという完成品の膚もやはり醜いのである。どう見ても日本人の知 皮病にかかっているとでもいいたくなるような、灰白色の不健康な膚を持った大都会を私は知らな あまり関係のない「西洋」という観念に。(ユ) 念に近い性質のものに見える。「現代建築」とか のにびっくりした。ニューヨークもロサンゼルスも美しい都会ではないが、 丸一年プリンストンで暮して、東京に帰ってきてみると、街の色調が想像以上に醜くなっている これはあながちオリンピック目当ての土木工事のためばかりではない。 それらは美をかたちづくる素材というより、 「機能主義」とか、 あるいは単に現実の西洋とは むしろむき出しになった観 いつの間にか新築され 東京のまるで街中が

ラ整備などによって変貌を遂げている最中の東京であった。ここで「私」はその東京の姿を「醜い」と 私 一時帰国したのは東京オリンピックを一年後に控えた一九六三年の夏であり、 まさにインフ

ったのである。 していた「私」の故郷である東京は、いまや実在しない「西洋」という「観念」でしかなくなってしま あまり関係のない 感じ、「むき出しになった観念に近い性質」のものだとみなしている。 『西洋』という観念」だと否定的に裁断されている。つまり、②や<br />
⑨で無条件に信頼 さらにそれは 「現実の西洋とは

郷を喪失し、新たに変容して行くことは当然の展開であるといえよう。 したがって、この「私」がもはや「自分の生い育った文化」や「私が成長してきた世界」といった故

次の⑪では、以下のような記述が見られる。

多数民族が、 語も朝鮮、 ほど大きな政治的役割を果たし得るということが、なかなか理解しにくい、 ってはまず文化の問題である。しかし「アメリカ」にとってはそれはまず政治の問題だ。 われわれのように、ひとつの民族からなる自然発生的な国家に生をうけたものには、言葉がこれ 台湾の植民地経営にあたって政治的役割を果しはしたが、これは日本語を母国語とする 朝鮮 語 福建語を母語とする少数民族を支配する道具としてつかわれたのである。(20 国語問題は かつて日本 日本人にと

国外の問題として説明されているに過ぎない。 して捉えているということである。 ここで「ひとつの民族からなる自然発生的な国家」とあるが、これは「私」が日本を単一民族国家と 確かに植民地としての朝鮮や台湾についても触れているが、

実は、これと似た記述が①にもある。①では、「極く少数の中国人と朝鮮人をのぞいて、日本人しか

45 という留保が、 ないといっていいわが国」(21) ⑪ではなくなり、 と日本を説明しているが、この①にある「極く少数の中国人と朝鮮人」 国外の問題が説明されているだけになる。

この この⑪の民族に関する認識自体多くの問題と誤解を孕んでいると考えられるが、さしあたって重要な 間 に関する視点を欠いていたわけではなかったからである。 日本 題が重要だと思われるのは、「私」=江藤淳がアメリカ留学以前には、このようなエスニシティ 闰 |内の日本語を母語としない者たちを「私」がほとんど考慮していないということである。

 $\coprod$ 有効な視点であると思われるので、参照しておきたい。一九五八年に江藤はアイヌ民族を取り上げた武 .泰淳の小説『森と湖のまつり』 (一九五八) を次のように批判していた。 少しテクストから逸れてしまうが、留学前の江藤をテクストにおけるゼロ段階の 「私」と考えれば、

彼女はかならずしも傍観者ではなく、 郎というアイヌ青年の英雄と肉体関係を結んだり、事件の渦中に身を投じたりするところを見れば う人道主義者的な和人の学者の秘書のようなことをして旅行している旅行者にすぎない。 反の結果、 ならずしも傍観者ではない旅行者、この不徹底な設定はおそらくそのままこの主題に対する作者の (前略) の部分はおろそかにされざるを得ないのである。(タュ 『森と湖のまつり』の一貫した話者は、 この作品 和人は の作中人物は奇妙に拡散し、 アイヌではなく、 事件に参加した人物であるが、さりとてアイヌでもない。 しかもアイヌは日本人でないことはない。 和人の女画商佐伯雪子であるが、 印象が弱められ、 武田氏の貴重な問題である存在 彼女は池博士とい このような 風森一太 二律背 か

論

のである。 はいえ を認めているのである。 うに、ここで江藤は「日本人」のなかに「アイヌ」と「和人」といった複数の民族が存在していること ここで江藤 「和人はアイヌではなく、 が問題としている論点は、エスニシティ問題とはなんら関係のないことなのであるが、 つまり、「日本人」がある種の概念、 しかもアイヌは日本人でないことはない」という記述が示しているよ あるいは幻想であることに充分自覚的な ح

国語としない少数民族や在日外国人の存在が忘れられてしまっているのである。 は見られ しかし、⑪の「ひとつの民族からなる自然発生的な国家」という記述には、 ない。 また、「国語問題は日本人にとってはまず文化の問題」という箇所では、「日本語 複数の民族という考え方

復しようとする意志があるように思われる。 生い育った文化」や「私が成長してきた世界」を喪失した「私」が、その「世界」を「国家」として回 の強制する言語を「日本人」の「文化」の問題として一般化しているところには、 人」を単一民族として考えるようになったとは言えない。だが、⑪で「私」が「国語」 もちろん先に指摘したように①にも似たような記述があるので、必ずしもこの時点で「私」が「日本 ⑩において「自分の という 国家

次に引用する⑮では、その「私」の意志が顕著に現れている。

つきであり、その意味でかならずしも私を日本という「国家」には近づけない。が、決してそれは はない。 私 は自分を日本につなげているきずながあると感じる。それは、 むしろ私のほうから日本に向かって行くものである。それは要請ではなく、 日本から私に向って来るもので 自発的な結び

単に個人的なきずなではない。私を含みながら、しかも私を超えているからである。もちろん、そ 私という個体を、万葉集以来今日までの日本文学と思想の全体につなげている日

本語という言葉である。(3) (傍点原文)

伝統」(マイ) というほかない古典とつながってしまうのである。 個人的なきずなではない。私を含みながら、しかも私を超えている」という記述には、「私」という個 いう言葉に端的に表れているように、「私」は意図的に「国家」を呼び込んでいる。また、「それは単に それは「国家」に「私」を近づけるものではなく、「自発的な結びつき」だという。この「自発的」と 人的な存在が国家的全体性の上に成り立っているということが説明されているのである。だからこそ、 「日本語」という「国家」の強制する「言葉」が選び取られ、さらに「万葉集以来」という「創られた ここで「私」は、 自分を「日本」につなげているものは 「言葉」という「きずな」だと述べている。

定していたが、⑩でその「自然」として「自分の生い育った文化」や「私が成長してきた世界」を喪失 して、⑪~⑰ではその喪失から回復するために「国家」というものが呼び込まれていた。 「アメリカ通信」全体として見れば、二つの性質を持った「私」が存在しているということになるだろ 以上に見てきたように、「アメリカ通信」の①~⑨の「私」は「自然」に属し、「社会的不正義」を肯 したがって、

う。

# 三 「アメリカと私」の「私」

の「私」は、「アメリカ通信」の⑪~⑰の「私」を引き継いでいる。 次に「アメリカと私」の「私」を検証していきたい。先に述べたように、「アメリカと私」のI~X

述べた後、次のようにこの「アメリカと私」という「物語」を語り始める。 Ι 「の冒頭近くで、「私」は二年間の留学終えて、「いま自分のうちのなにかが変ったと感じている」と

時期があった。まず、そのころのことから書きはじめようと思う。(5) して行くような、 時間がかかった。 と感じるほど深く米国の社会につかってしまっていたらしい。もちろんそうなるまでにはかなりの (前略) どうやら私は、かつて空気のように自然なものと感じていた日本の社会をどこか あるいは自分の存在意義が無限に縮小して行くような、 私が、米国の新しい環境で、もとの自分を取り戻すまでにすら、「生活」 短いがかなり深い混乱の が気化

るエピソードから見てみたいと思う。 ぜなら、「私」は ある。だが、「アメリカと私」の喪失体験はそのようなものではないのである。まず、Iで語られてい という。すでに「アメリカ通信」の検証をしてきた本稿にとっては、その変化は自明のものである。 ここで「私」は自分が変ったことに自覚的である。それは「日本」を「異質」に感じるほどの変化だ 「自分の生い育った文化」や「私が成長してきた世界」の喪失を体験 いしてい るからで

自らロックフェラー財団に治療費用を請求し、また保険会社からも支払い金額をすべて受け取る 🙉 。 心理的混乱を味わうすべがない」と感じる。ようやく病院を見つけたが、治療費にロックフェラー の国で自己を主張しようとしたら、まず適者でなければならない」と確信して、「適者」となるべく、 者であることは『悪』である。『悪』は当然『善』であるところの適者に敗れなければならない」、「こ 社会の「『適者生存』の論理」を発見するのである。「私」はアメリカでは「病人は不適者であり、不適 からの給費のほとんどを費やしてしまい、アメリカの医療制度に困惑する。そのようにして、アメリカ 院を探すのに苦労してしまう。そして、「私には家内の肉体的苦痛を感じるすべがなく、家内にも私 う話題から語られている。「私」は妻を病院に連れて行こうとするのだが、不運にもその日は休日で病 「アメリカと私」の概略を述べておく。 このようにⅠで提示された「『適者生存』の論理」は、このあとのⅡ~Ⅹを貫く論理でもある。 1では、アメリカ留学に同行した「私」の妻が、アメリカに到着してすぐに腹痛で倒れてしまうとい -財団

留学直前に日本で刊行していた『小林秀雄』が新潮文学賞を受賞したことと、プリンストンで「East であったことはほとんど知られておらず、そうである以上、自分は「社会的な死を体験」(タン)している しての「私」は知られておらず、このことで「自己の同一性」の危機に陥ってしまうのである。 九六一) などの評論で(28)、 デビューして以来、『奴隷の思想を排す』(一九五八)、『作家は行動する』(一九五九)、『小林秀雄』(一 のだと感じるようになる。当時「私」=江藤淳は、日本の文壇ではすでに『夏目漱石』(一九五六)で 「私」はこの後、プリンストンで生活をはじめるが、すぐにアメリカにおいては自分が日本の批評家 気鋭の若手批評家として認知されていた。しかし、 アメリカでは批評家と

学」や「近代日本文学」の講義や、大学院のゼミを担当するようになる(ヨ)。 Asian Studies Program」という研究会で「小林秀雄に関する紹介ノート」<sup>(②)</sup> という発表をしたことが を主張し「適者」になっていく。さらに留学二年目には、プリンストン大学の東洋学科で「古典日本文 て給費を増額し、 日常生活においても「『適者生存』の論理」に従って、ロックフェラー財団に自ら手紙を送り交渉をし 重なり、これをきっかけに少しずつ批評家としての「自己の同一性」を回復していくのである。また、 あるいは自宅でアメリカ式のパーティーを開くなどして、徐々にアメリカ社会で自己

ると思われる なのである。そのため、「アメリカと私」が「自己の同一性」を回復する「物語」となるのは必然であ という変容の道筋があらかじめ提示されているわけである。したがって、「アメリカと私」の喪失体験 リカと私」ではIにおいて、「不適者」から「適者」へ、あるいは「自己の同一性」の危機から回復へ まさに、このようにして「私」はアメリカ社会で「適者」として成長していく。 「自分の生い育った文化」や「私が成長してきた世界」の喪失ではなく、「自己の同 したがって、「アメ 一性 の喪失

「私」ついてのみ考察していきたい。 以下、「アメリカと私」を詳しく見ていくが、ここでも先に述べた通り限定的に「アメリカと私」

ったという。そして、プリンストン大学出身の作家スコット・フィツジェラルドに目をつけるのだが、 書いていたことが明かされる。ところが、それは「米国に対するてれ」から生じたもので本気ではなか まずⅢでは、 私 が留学前、 ロックフェラー財団の書類に研究テーマを 「十八世紀英文学研究」と

フィ と語っている。このような認識をするなかで、「私」は自らが日本人であることを意識していく(ヨ)。 私の周囲 ている欧州系の ツジェラルドすらも満足の行く研究対象には思えなかった。その理由を「私はフィツジェラルドが、 にいる、 異った神を信じ、異った肌と髪と体型を持ち、異った倫理と生活態度とによって生き ―つまり大多数の米国人のひとりであることを、まず感じないわけにはいかなかった」

化遺産の一切とともに、引受ける必要があった。(32 私は、まず、自分が自分であってそれ以外の何者でもないことを、自分を育てた日本の歴史と文

びたものではなかったはずである。 ②では先に示したように「自分の生い育った文化」が無条件に信じられていて、決して「歴史」性を帯 である「私」にほかならない。ところが、このⅢのテクスト内の時間に隣接する、「アメリカ通信」の 自分であってそれ以外の何者でもない」というときの「自分」とは「歴史」的に位置づけられた日本人 「自分」を「歴史」に連なるものとして位置づけているのである。したがって、この「私」が ここで「私」は「自分を育てた」ものを「日本の歴史と文化遺産」と明確に規定している。つまり、 「自分が

次に引用するⅣも同様である

の二つの国のあいだにいる自分が、ほかならぬ日本語の文化の樹液を受けて生きていることを、 そして、コンファレンスのはじまる前の日の朝にまいこんで来た『小林秀雄』 受賞の電報は、 あ

という感覚が、ようやく蘇りつつあった。 るひそかな誇りとともに、 思い知らせた。 私は、 私のなかには、 明らかに生きはじめていた。(33 自分がなんであり、今どこにいるのか、

化の樹液を受けて生きている」と感じている。ここにおいても「日本語の文化」とある以上、「自分が なんであり」というときの「自分」は、「日本」に属している。 が新潮文学賞を受賞したという報せのことである。ここで「私」はその報せを聞いたとき「日本語の文 ここで言及されている「『小林秀雄』 受賞の電報」は、 先に触れた留学直前に刊行した『小林秀雄

メリカ通信」のテクストには見ることができなかった「私」である。(34 まうところにも、「私」が「日本」に帰属しようとする意志が垣間見える。 じているが、ここで単なる「ひとりの批評家」ではなく、「日本語の文化に存在する」と付け ひとりの批評家として、そのままのかたちで少数ではあるが熱心な聴衆に、うけいれられていた」と感 あるいは、「私」がある研究会での発表を終えた直後に「私は、今、 日本語の文化のなかに存在する これも時間 の隣接する「ア 加えてし

図的操作はⅥにおいて例えば次のように表象される 在するひとりの批評家」 ところで、この 私 といった自己規定をしているわけだが、このような表現に付帯するある種の意 は「日本語の文化の樹液を受けて生きている」とか 日 本語の文化の な に存

ある。この一民族一国家という、まれにみる均質な国には、ヴィリエルモ氏のような「親日家」を ・かがいったように、日本という国は、国中がひとつのプライヴェット・クラブのような国で

執拗な拒否の力がかくされていた。(35

あるいは、 Ⅲの大学の講義においては、「日本」は次のように説明されている。

集団は、 る単一民族の形成につながる政治的事件でもあった。(38) 合することが、とりもなおさず「日本文学」の誕生につながり、 ていたという意味で、今日の合衆国とどこか似ているともいえること。しかし、これら各々の移民 (前略) キリスト紀元前後の数世紀間の日本は大陸、 共通の文化として水稲作を共有しており、その個々の神話 半島、 及び南洋からの移民によって形成され 今日「日本人」として知られてい ――太陽と水をめぐる神話を統

の文化のなかに存在するひとりの批評家」という自己規定の背後には、本来存在しているはずの さしあたって、ここから理解できることは、「日本語の文化の樹液を受けて生きている」とか「日本語 また、Ⅷも一時帰国を挟んでからの出来事なので、「アメリカ通信」の⑪にある認識と同様であろう。 に関しては回想的にこのような認識を述べているのであるから、作者江藤淳の現在進行形の認識である。 ような認識は、言うまでもなく少数民族や在日外国人の存在を忘却することで成り立つ。もちろん、Ⅵ ここで「私」は「一民族一国家」、「単一民族」として「日本」や「日本人」を説明しているが、この を母語としない者たちの忘却することによって、自己の帰属する「日本」を確立しようとする意志 「日本

がみてとれるということである

なり、 そして、このような忘却によって確立した「私」 国家として前景化してくる。次に引用するⅢの一節はそれをよく示している。 が帰属する「日本」とは単なる文化的背景ではなく

両 Nation's Service を想っていたあの時代-私は、ここには依然としてあり、 び覚されたために感じた幻覚だったかも知れない。幻覚であるにせよ、それは快い体験であった。 ものが充満している東京から来た私が、異質の学園に触れて、自分のなかで眠っていたなにかを喚 的氏族たらんとする「書生」たちが、ウェブスターの辞書を前にして、 周囲に士族の雰囲気とでもいうべきものを感じたのである。が、それは単に、あまりに反士族的な の眼に涙がにじみ出て来るのを感じた。(37 ふと自分が明治時代に投げかえされたような幻覚を感じた。士族出の、 戦後の日本からは消え去ってしまったある精神を想った。 ――つまり、私は、そのときほんの一瞬の間ではあったが、 いわば learnings in the あるいは新しい知 私は、

とおり、「私」 まったある精神」を想っているが、この「ある精神」とは「learnings in the Nation's Service」 「お国のため」とも言うべき「精神」である。この「Nation」(=国家)という言葉が端的に示している ここで「私」はプリンストン大学の構内で「明治時代」を幻視し、「戦後の日本からは消え去ってし が意識する「日本」とは国家のことにほかならない。

私」では前半においてすでに「私」の「国家」に対する帰属意識が表れているのである。このように

したがって、「アメリカ通信」では後半に「国家」を志向する「私」が表出していたが、「アメリカと

186

ということがわかるのである。 「アメリカと私」を見てみれば、この物語に表出している「私」が、明らかに帰国後に創られたものだ

ができるだろう。 文化」という枠組みを作った上で、「国家」としての「日本」に帰属しようとしていると結論すること 以上に見てきたように、「アメリカと私」の「私」は、「自己の同一性」を保障するために「日本語の

### 四 「白樺」としての「私」

帰属していて、「アメリカ通信」(①~⑨)の「私」は「自然」に属しているということである。先に見 たようにこの「自然」は、「死」や「詩」、あるいは「黒人」や「官能」、「本能」、「破壊」、「爆発」とい 言えば「私」の帰属意識の違いである。つまり「アメリカと私」の「私」は「国家」としての「日本」に ったものを包括するイメージであった。したがって、原初的なイメージの総体として考えられているの ここまで、「アメリカと私」と「アメリカ通信」の「私」の差異を検証してきたが、この差異は端的に

ところで、この「自然」に属する「私」はどのような「私」なのか。最後にこの「私」の性質に関し

て触れておきたい

えば、先に示した⑥では南部の「美と頽廃した権力の腐臭との対照がつくり出す奇妙にエロティックな」 「アメリカ通信」 前半部の 「私」は 「自然」に属しており、「社会的不正義」には肯定的であった。例

いま一度その南部の描写を引用してみたい。景色をみて「私」は「ほっと」していた。

どこか放恣な感覚に媚びるようなものを持っている。 に見えぬものの攻撃に対して耳を澄ませているような、 て、落魄をきわめたという感じの黒人街があり、そこにうごめいている黒人たちの顔は、 表情とはちがって、 な館が立ち並んでいる。それはたいてい高い厚いヘイか、 たとえばここにはプリンストンあたりには見られない、 鈍い無表情に塗りつぶされているように見える。 しかも、これらの館とほとんど背中合せなっ 北部の「差別されていない」黒人の 南北戦争以前の面影をとどめた古い豪奢 繊細だが強靭な鉄柵をめぐらしていて、 つねに眼 の過敏な

に位置するようなものである。これは言い換えれば、「国家」的秩序の対極にある、 このような南部を「私」は「社会的不正義」と呼んでいたのである。これは明らかに「国家」 無秩序状態の 0) 対極 自

ところが、「アメリカと私」のⅥには、 いま引用した「アメリカ通信」の⑥とは対照的な記述が見ら

れる。

然」であろう。

テキサス) (前略) 年末年始の休暇を、 の旅行についやして、久しぶりにわが家に帰りついたころには、不思議なことに、 新潮賞の賞金を旅費にあてた南部三州 (南カロライナ、ルイジアナ、

れたのである。(38) 支線の駅を降りたとたんに、家内と私は、 囲気にあふれた、 あれほどはいりにくく見えたプリンストンが、すでに「自分の町」に変身していた。それは知的雰 清潔な、 (傍点原文) 気品のある町であり、私はそこに属していた。ペンシルヴェニア鉄道の あの家に帰って来たときの、ほっとした気持にとりつか

通信」との間 る。それこそ「同一性」を疑いたくなるような「私」の突然の変化が、「アメリカと私」と「アメリカ た権力の腐臭との対照がつくり出す奇妙にエロティック」な南部に「ほっと」した直後のことなのであ 「ほっとした」と感じているのである。テクスト内で語られている時間に沿って考えれば、「美と頽廃し ここでは南部の旅行から帰ってきた「私」が「知的雰囲気にあふれた、清潔な、気品のある町」に には起こっているのである。

あるいは、 いま引用した「アメリカと私」の記述の直前には次のような箇所がある。

受性を喪くしかけていた。それが米国の生活に少しずつ足を踏み入れて行くうちに、突然自分のな (前略) かに回復され、それと同時に、自然もまた自分に近づいて来る……。この感覚は、貴重であった。(39) 意味もなく忙しい東京の文筆生活のあいだに、私はいつの間にか季節の移り変りに対する感

の⑤で「私」は、「日本語」という「きずな」は「かならずしも私を日本という『国家』には近づけな 「自然」が、「自分に近づいて来る」ものだとされている。 先に引用した「アメリカ通信

ここには「自然」という語の意味の変容とも言うべきものが起きているのである。 のである。そもそも右の「自然」が「季節の移り変り」という極めて秩序だったものとして認識されて いる以上、「アメリカ通信」における無秩序状態の「自然」 いるものだったのである。 ものだとも説明していたのであった。つまり、「日本語」や「国家」とはあらかじめ「私」を包括して あえずは考えられそうである。 い」と感じていた。 時に感受されているのであるから、これは「日本語」や その意味では右の したがって、右の引用では「自然」 しかし、 「自分に近づいて来る」「自然」とは違う性質のものだと、 ⑥では「日本語」を「私を含みながら、 とは異なるものなのである。 「国家」を再発見したことと同種の現象な が「自分に近づいて来る」感覚が しかも私を超えている」 したがって 回復

難問に直面」することで起き、漱石が「『私』の露出を、『悪』あるいは『醜』とし、『善』または の崩壊は を再評価したのであった。江藤によれば、この「朱子学的世界像」は「西洋」との接触によって危機に を決定したのは、幕府が公式のイデオロギーとして採用した朱子学であった」とし、「朱子学的世界像 機と自己発見」という評論を発表したと述べたが、この評論において江藤は たとする江藤は、「この世界像の完全な崩壊を体験するのは、たとえば夏目漱石である」と論じる。こ 「文学」観を近代化すべく書かれたという。しかし、 ところで、本稿の冒頭で、 「西洋」という「他人」に出会うことによって引き起こされるが、 内逍遥の という。 そのような「喪失感」「『私』―自我という巨大な怪物をどう処理すべきかという 『小説神髄』は「朱子学的世界像」のもとで形成された江戸戯 江藤淳は『アメリカと私』を刊行したのちに、「日本文学と「私」 逍遙はまだ「朱子学的世界像」のなかで生きてい それは 「江戸期の日 「幻滅と深 殿作の勧 善懲悪的 、喪失感 危

漱石批判「『それから』に就て」(一九一〇)を引用した後、江藤は次のように述べる。 な漱石世代に対して江藤は、 とは見なかったのは、 つまり、 この意味で漱石の世代はいまだに「朱子学的世界像」の影響下にあったのである。 彼の喪失感がいかに深かったかを物語っている」と江藤は指摘している 白樺派の代表的作家である武者小路実篤を対置させる。 武者小路の有名な そのよう

は、 ある。 張を「悪」、あるいは るのはこの場合いまだに朱子学的価値体系の枠内に安住している者の「常識」、あるいは (前略) 漱石と激しく対立する。(41 『それから』で、漱石は、 武者小路氏が「自然」といっているのは「私」―「自我」のことであり、「社会」と呼んでい 「醜」とした。この点で、当時の新世代であった「白樺」の作家武者小路氏 代助を社会からはじき出された者とすることにおいて彼の自己主 「道徳」で

次のような指摘である。 立とは「私」・「自我」 うに「私」あるいは「自我」という言葉に置き換えられる。 ·新世代の倫理」としたとも述べている <sup>(4)</sup>。 当然の事ながら、 江藤はこの引用の後で、「白樺」は「自然を社会に調和させず、社会を自然に調和させる」ことを の捉え方の違いとなるわけである。この違いを端的に示しているのが、 したがって、漱石世代と「白樺」世代の対 この場合の 「自然」 は右の引用 にあるよ 江藤(

(前略) かつて自己完結的な秩序を保障していた朱子学的世界像が崩壊したとき、皮肉なことに日

足した無秩序の肯定であった。(4) (傍点原文) 本は新しい自己完結的無秩序に到達していたのである。「白樺」の自己肯定は、 ほかならぬこの充

と「白樺」世代との対立にそのまま対応するのである。 る「私」と「国家」に帰属する「私」の関係は、「日本文学と『私』――危機と自己発見」の漱石世代 として肯定していた。しかし、「日本文学と『私』 である。ここで江藤が「白樺」の「私」を「無秩序の肯定」であったといっていることに注意したい。 しまったと述べているのであるが、その「私」だけの世界を「自己完結的無秩序」だと批判しているの 「白樺」の「私」を批判しているのである。つまり、『アメリカと私』において表出した「自然」に属す 前に述べたように、「アメリカ通信」前半部の「私」は無秩序的な「自然」状態を「社会的不正義 ここで江藤は 「白樺」の台頭を機に、近代日本文学は「社会」を見失い、「私」だけの世界に陥って 危機と自己発見」では、「無秩序」を肯定する

はない。 あり、 半部の「私」と「白樺」の「私」が対応してしまっているのである。このことの意味はきわめて重要で おいても白樺派は批判の対象となっている。だが、それにもかかわらず、ここでは「アメリカ通信」前 た江藤は、必ずしも白樺派を評価してはいなかった。また「日本文学と『私』 ここで詳述することはできないが、『夏目漱石』でデビューして以来、一貫して漱石の支持者であっ 『アメリカと私』以前に書かれた江藤の批評の読み直しが必要であろうが、それは本稿 -危機と自己発見」に の目的で

ここでさしあたって理解しておきたいのは、「アメリカと私」の「自然」が秩序を意味しており、「ア

機と自己発見」で示した「白樺」の「私」が、「アメリカ通信」前半部の「私」と合致しているという メリカ通信」 前半部の「自然」が「無秩序」を意味していたことと、江藤が「日本文学と『私』 危

### おわりに

ることで、「私」の性質を検証した。その結果、語り手たる「私」が、「自然」という無秩序に属し「社 会的不正義」を肯定する「私」から、「国家」としての「日本」や「社会」という秩序に帰属する ストである。 メリカ通信」は留学中に記録されたものである。本稿ではこれらのテクストを初出の発表順に並べ替え へと変容していることがわかった。 本稿の冒頭で述べたように、『アメリカと私』 は「私」(=江藤淳) 第一部の「アメリカと私」は、帰国後に留学の記憶として書かれたもので、第二部の の記憶/記録が編み上げられたテク 私

この構成にある種の意図があるというのは、過言であろうか。 この変容の過程は、 既存の配置構成に従って読むだけでは容易に表出してくるものではない。 では、

リカ通信」の前半部という原型的な「私」が表出している部分だけに、そこにある種の意図を感じざる 例えば、江藤淳が生前、最後に刊行した文春文庫版の『アメリカと私』(一九九一)では、「アメリカ の③~⑩と⑰が削除されて、代わりに一九七二年に刊行された『アメリカ再訪』(4) これにはもちろん、さまざまな編集上の理由があったのだろうが、削除されている箇所が が抄録され 一アメ

てしまっているように思われる。 を得ない。 この削除によって あるいは、この削除は逆に、削除した部分への注意喚起だったのかもしれない。 『アメリカと私』という記憶 /記録からなる書物の持つ意味は著しく改変され いずれにし

のである うことを提示することで、近代の多くの外国経験者が体験した「日本回帰」の文脈から、 るように思われる。つまり、「私」はアメリカに行って変容したのではなく、「私」を回復したのだとい て読めるわけであるが、この回復の物語には「洋行帰りの日本回帰」という常套句を否定する意図があ 『アメリカと私』を既存の配置構成にしたがって読むと、「自己の同一性」の危機から回復する物語とし おそらく初版『アメリカと私』の構成にも、作者の明確な意図があったはずである。前述したように、 一線を引いた

後の課題として、本稿を締めくくることにしたい。 る。だが、そうだとしても江藤淳と白樺派というつながりはテクストには見出せるわけである。 うのも、 の「私」はあると考えられる。それは江藤にとっては否定されるべき「私」だったにちがいない。 『アメリカと私』以後の江藤の批評の軌跡を見ていく上でも、新たな視点になると思われる。これを今 しかし、そのような意図を超えたところに、「アメリカ通信」前半部の「私」、つまり - 先に述べたように、批評家としての江藤淳は必ずしも白樺派に肯定的だったわけではない もちろん、江藤の論じる「白樺」が、実際の白樺派をどの程度正確に描い (しおや まさひろ・日本文化専攻博士課程 ているかは 「白樺」 疑問 であ から

- (1) 江藤淳 『アメリカと私』 (朝日新聞社 一九六五・二)、七頁。本稿の引用はこの朝日新聞社版による
- 論集 二○○五・九)などが江藤のアメリカ留学の背景に関して意義深い研究を行っている。また、佐藤には別に ○○五・八〕所収)、松下浩幸「江藤淳 『アメリカと私』 論――戦後日本の自画像とその問題点: 佐藤泉「『治者』の苦悩 ―アメリカと江藤淳」 (『戦後批評のメタヒストリー―近代を記憶する場』 [岩波書店 ——」(明治大学教養
- 有吉佐和子論があり、有吉佐和子のアメリカ体験と江藤のアメリカ体験と比較して論じている。 「『非色』─複数のアメリカ/複数の《戦争花嫁》」(『有吉佐和子の世界』〔翰林書房 二○○四・一○〕 所収) という
- (3)アメリカへの留学年は、福田恆存、大岡昇平(一九五三年―一九五四)、中村光夫(一九五五―同途中帰国)、阿 安岡章太郎 (一九六〇—一九六一)。 川弘之(一九五五年—一九五六)、小島信夫、庄野潤三(一九五七—一九五八)、有吉佐和子(一九五九—一九六〇)、
- (4)邦訳『日本における近代化の問題』 (細谷千博編訳、岩波書店 一九六八・七)。
- (5)江藤渟「日本文学と『私』――危機と自己発見」(「新潮」 一九六五・三)、本稿では福田和也編『江藤渟コレ クション4』(ちくま学芸文庫 二○○一・一○) 所収のものを参照した。
- (6)江藤淳『アメリカと私』(講談社 私』(文春文庫 一九九一・三)、『アメリカと私』(講談社文芸文庫 二〇〇七・六)。 一九六九・五)、『アメリカと私』(講談社文庫 一九七二・六)、『アメリカと
- (7)これまで、「~と私」というタイトルは、『アメリカと私』においてはじめて使われたと考えられてきたが、それ よりも前に「仔犬と私」(『ヒッチコック・マガジン』〔一九六〇・一〕、『犬と私』〔三月書房 一九六六・四〕所収)、 「バルザックと私」(『バルザック全集』〔東京創元社 一九六○・一〕、前掲『犬と私』所収)、「石原慎太郎と私
- る。参考までに、『アメリカと私』以降のものここに挙げておく。「現代と漱石と私」(初出不明〔一九六六・一〕、 前掲『文学と私・戦後と私』所収)、「文学と私」(『われらの文学 イがある。本稿で『アメリカと私』を端緒とみるのは、そのタイトルが意識的に使われたという意味においてであ 「文学と私・戦後と私』 6』〔筑摩書房 一九六○・七〕、『石原新太郎論』〔作品社 二○○四・四〕所収)というエッセ 一九七四・一〕所収)、前掲『犬と私』、「戦後と私」(「群像」〔一九六六・一〇〕) 22』〔講談社 一九六六・一一〕)、「『星陵』と私

江頭淳夫名義で「安藤元雄とぼく」(安藤元雄 九九七・一〇〕所収)、『妻と私』〔文芸春秋社 四・一一〕)、「ケネディと私」(「朝日ジャーナル」〔一九八八・一二・二〕)、「『ジャーナル』と私」(『人と心と言葉 九八三・九〕、『批評と私』〔新潮社 現代」〔一九七六・?〕、前掲『続々こもんせんす』所収)、「『海は甦える』と私」 所収)、「テレビドラマと私」 (初出不明〔一九七六・五〕、前掲『仔犬のいる部屋』所収)、「『海は甦る』とわたし」 私」(「波」〔一九七四・一一〕)、「学位と私」(初出不明〔一九七五・五〕、『なつかしい本の話』〔新潮社 七一・六・一〇〕、『アメリカ再訪』〔文芸春秋社 一九七二・四〕所収)、「場所と私」(「群像」〔一九七一・一〇〕、 七・一〕、『旅の話・犬の話』〔一九七○・九〕所収)、「英語と私」(講演〔一九六九・七〕、『考えるよろこび』 〔文芸春秋社 一九九五・七〕)、「SFC と漱石と私」(「Voice」〔一九九七・四〕、『国家とはなにか』〔文芸春秋社 (「週刊現代」〔一九七六・?〕、『続々こもんせんす』〔北羊社 八四・一一〕所収)、「『明治の群像』と私」(初出不明〔一九七六・五〕、『仔犬のいる部屋』〔講談社 八・五 『フロラ。フロラアヌと少年の物語』〔北羊社 『仔犬のいる部屋』所収)、「『戦艦大和の最後』と私」(「諸君」〔一九八一・二〕)、「小林秀雄と私」(「文化会議」〔一 和也編 一九七〇・一〕)、「山川方夫と私」(『山川方夫全集 所収)、「漱石と慶応義塾と私」(講演〔一九七五・五〕、『新編江藤淳文学集成 『江藤淳コレクション 「星陵」〔一九六六・?〕)、「日本と私」(「朝日ジャーナル」〔一九六七・一・一一三・一七〕、 2』〔ちくま学芸文庫 二〇〇一・八〕)、「初詣と犬と私」(初出不明 一九八七・七〕所収)、「ワープロと私」(『西御門雑記』〔文芸春秋 一九八 一九七四・一一〕所収)、前掲『文学と私・戦後と私』、「夏目漱 『秋の鎮魂』 一九九九・七])。この他に江藤淳としてデビューする前に、本名の 5』〔一九七○・四〕)、「ブレ氏と私」(「週刊現代 〔位置社 一九五七・九〕所収)というしおりがある。 一九七六・一一〕所収)、「健康法とわたし」(「週刊 (初出不明〔一九七七・八〕、 1』〔河出書房新社 一九七九・六)

(8)前掲、「日本文学と『私』――危機と自己発見」参照。

(9) 社会心理学者のエリック・エリクソンが提唱した概念。 介したことを通じて、日本社会に浸透し、定着した」(「脱アイデンティティの理論」、上野千鶴子編 れるが、社会学者の上野千鶴子は「アイデンティティ」という概念は ティ』〔頸草書房 二〇〇五・一二〕所収、四頁)と述べている。しかし、 因みに「自己の同 「江藤淳が、『成熟と喪失』[1967]のなかで紹 本稿で示したように江藤淳がこの概念 性 は 「アイデンティティ」 『脱アイデンテ

力体験は、 をはじめて用いたのは『アメリカと私』においてである。だとすれば、この概念を使って説明された江藤のアメリ 当時の読者にどの程度理解されたのであろうか。

- 10 川島至 「アメリカと私」、『國文學』(學燈社 一九七一・一)一〇二—一〇七頁
- 11 前掲、 佐藤泉「『治者』の苦悩――アメリカと江藤淳」一五五頁
- 12 前揭、 松下浩幸「江藤淳『アメリカと私』論-戦後日本の自画像とその問題点 一二二八頁。
- 13 朝日新聞社版『アメリカと私』にのみ奥付に「発表紙覚書」として、初出一覧が載っている。
- $\widehat{14}$ 前掲、 『アメリカと私』 一七一頁
- 16 同右、 一八五頁。

15

同右、

二六一二七頁

- $\widehat{17}$ 同右、 二一一二二三頁。
- 18 同右、 二三九—二四○頁
- 19 同右、 二四一頁
- 20 同右、 二五三頁

 $\widehat{21}$ 

同右、

一七五頁

- (2)江藤淳「『氾濫』と『森と湖のまつり』」(「近代文学」 所収、一六頁。 一九五八・九)、江藤淳『海賊の唄』(みすず書房 九
- (23)前掲、『アメリカと私』二八九頁

五九・八)

- (2) エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編 一九九二・六) 参照 『創られた伝統』 (前川啓治、 梶原景昭他訳 紀伊国屋書店
- 25 前掲、 『アメリカと私』一一頁。
- (26) この段落の引用は前掲、 『アメリカと私』七―二三頁
- $\widehat{27}$ 同右、 六〇頁
- 江藤淳『夏目漱石』(東京ライフ社 一九五六・一一)、『奴隷の思想を排す』(文芸春秋社 一九五八・一一)、

『作家は行動する―文体論について―』 (講談社 一九五九・一)、『小林秀雄』(講談社

- 前掲、 『アメリカと私』六九頁。
- 30 同右、一一七—一三二頁、一五〇—一六五頁参照。
- (31)この段落の引用は前掲、『アメリカと私』三九―五四頁。
- 33 同右、六九頁。

32

同右、

四六頁。

35 34 この段落の引用は前掲、 同右、 九五頁。

『アメリカと私』七〇頁。

- 37 36 同右、 四八—四九頁。 一三三頁
- 38 同右、 同右、 八七一八八頁。
- 39 八七頁。
- 40 前掲、 「日本文学と『私 -危機と自己発見」参照。
- $\widehat{41}$ 同右、 九九頁。

 $\widehat{42}$ 

同右、

一〇四頁。

- $\widehat{43}$ 同右、 一〇七頁。
- 江藤淳 『アメリカ再訪』(文芸春秋社 一九七二・四)。